甘樫丘をめぐる遺跡の動態
－甘樫丘遺跡群の評価をめぐって－

相原　嘉之

Ⅰ．はじめに

甘樫丘の頂上にある展望台から南東の方向をみると、眼下の飛鳥寺から飛鳥宮、さらに遠くには石舞台古墳方面が見渡せ、背後には多武峰の山々が連なる。一方、振り返って北西方向をみると大和三山や生駒・葛城の山々、そして広大な藤原京が広がっていることが感じられる。飛鳥のビューポイントである。今から1300～1400年前も変わらず、甘樫丘は飛鳥において、地理的にも歴史的にも重要な位置を占めていた。現在、甘樫丘の東半分は国営飛鳥歴史公園として整備されているが、この甘樫丘において、近年注目される遺跡の調査が相次いでいる。特に、７世紀前半における遺跡の状況は、蘇我氏と密接な関係があり、７世紀中頃を境に、その性格は一変すると考えられるようになってきた。

本稿では、これら甘樫丘の遺跡群を概観し、その性格を明らかにすることによって、甘樫丘の重要性を再認識したい。

Ⅱ．史料にみる甘樫丘とその範囲

まず、甘樫丘関係の史料を確認しておこう。『古事記』『日本書紀』によると、允恭天皇の時代に「味白檮」「味橿丘」とあり（史料１・３）、これが「甘樫丘」の初出である[1)]。いずれも盟神探湯に関わる記事で、現在でも甘樫丘北麓にある甘樫坐神社では盟神探湯神事が行われている。ただし、この神社が古来より当地にあったかは明らかではない。神社の境内は豊浦寺跡と重複しており（橿考研1998）、甘樫坐神社がここに鎮座するのは、少なくとも中世以降と考えられる。

続いて、敏達14年（585）には、蘇我馬子が塔を大野丘の北に建てたとある（史料４）。かつては和田廃寺のこととされていたが、年代的に問題があり、今では不詳とされる。しかし、現在の甘樫丘から西方の丘陵地帯が「大野丘」と推定され、推古記には、推古天皇初葬陵が大野の崗の上にあったと記され（史料２）、植山古墳がその有力な候補地とされている。皇極３年（644）11月条に「蘇我大臣蝦夷・兒入鹿臣、家を甘檮丘に雙べ起つ」とある（史料６）。さらに斉明５年（659）には「甘檮丘の東の川上に、須彌山を造り」とみえ（史料８）、須弥山が石神遺跡出土の須弥山石とすると、甘樫丘が現在「甘樫丘」と呼ばれる丘陵であることは間違いないと思われる。

そもそも、この丘陵が「甘樫丘」と周知されたのは、古いことではない。飛鳥保存が叫ばれた昭和40年代頃からであり、それまでは地元で「豊浦山」と呼ばれていた。しかし、先にみたように甘樫坐神社の存在や、他に該当する丘陵がないこと、上記の史料からみて、現在の甘樫丘と理解して問題はない。

では、「甘樫丘」あるいは「大野丘」と呼ばれていた範囲はどこまでであろうか。丘陵の西側はすでに開発によって住宅となっており、旧地形が失われている。そこで、奈良国立文化財

研究所作成の昭和30年代の地形図を基に検討してみる（第５図）。現在の甘樫丘から尾根続きの範囲である、植山古墳や五条野向イ遺跡も同じ丘陵に含まれる。ここで問題となるのは、まず和田池の西から剣池の北に延びる尾根である。ここも本来は丘陵としては続いており、甘樫丘の一角ともみられる。ただし、古代官道である山田道が尾根を分断していることから、山田道以北は当時、「甘樫丘」とは呼ばれていなかった可能性が高いと考える。もうひとつ問題となるのが、五条野丸山古墳の堤にあたる部分である。ここまでが甘樫丘と呼ばれたとすると、五条野丸山古墳は甘樫丘に営まれた古墳であったことになる。しかし、この堤の北への続きには軽寺があり、ここが甘樫丘と呼ばれたとは認めがたい。後に検討するように、五条野丸山古墳は「軽」の地に所在したと考えられる。このように理解すると、「甘樫丘」は、現在住宅地になっている部分も含めた呼称であり、上述の山田道以北と五条野丸山古墳及びその堤を除いた尾根沿いの丘陵と理解できる。

「甘樫丘」関連史料（稿）

（史料１） 允恭記

「於是、天皇、天下の氏々名々の人等之氏姓の忤ひ過てるを愁ひたまひ而、味白檮之言八十禍日前於玖訶瓮居ゑ而、天下之八十友緒の氏姓を定め賜ひき。」

（史料２） 推古記

「御陵は大野の崗の上に在りしを、後に科長の大陵に遷しまつりき。」

（史料３）允恭紀４年(415)９月28日条

「(前略)是を以て、一の氏蕃息りて、更に萬姓と為れり。其の實を知り難し。故、諸の氏姓の人等、沐浴齊戒して、各盟神探湯せよ、とのたまふ。則ち味橿丘の辭禍戸硎に、探湯瓮を坐ゑて、諸人を引きて赴かしめて曰はく、「實を得むものは全からむ。偽らば必ず害はなむ」とのたまふ。是に、諸人、各木綿手繦を著て、釜に赴きて探湯す。則ち實を得る者は自づからに全く、實を得ざる者は皆傷れぬ。是を以て、故に詐る者は、愕愕　ぢて、豫め退きて進むこと無し。是より後、氏姓自づから定りて、更に詐る人無し。

（史料４）敏達紀14年（585）２月15日条

「蘇我大臣馬子宿禰、塔を大野丘の北に起てて、大會の設齋す。即ち達等が前に獲たる舎利を以て、塔の柱頭に藏む。」

（史料５）皇極紀元年（642）是歳条

「盡に國學る民、并て百八十部曲を發して、預め雙墓を今来に造る。一つをば大陵と曰ふ。大臣の墓とす。一つをば小陵と曰ふ。入鹿臣の墓とす。望はくは死りて後に、一を勞らしむること勿。更に悉に上宮の乳部の民を聚めて、塋垗所に役使ふ。

（史料６）皇極紀３年（644）11月条

「蘇我大臣蝦夷・兒入鹿臣、家を甘檮丘に雙べ起つ。大臣の家を呼びて、上の宮門と曰ふ。入鹿が家をば、谷の宮門と曰ふ。男女を呼びて王子と曰ふ。家の外に城柵を作り、門の傍に兵庫を作る。門毎に、水盛るる舟一つ、木鉤數十を置きて、火の災に備ふ。恆に力人をして兵を持ちて家を守らしむ。」

（史料７）皇極紀４年（645）６月13日条

「蘇我臣蝦夷等、誅されむとして、悉に天皇記・國記・珍寶を焼く。船史惠尺、即ち疾く、焼かるる國記を取りて、中大兄に奉献る。是の日に、蘇我臣蝦夷及び鞍作が屍を、墓に葬ることを許す。復哭泣くを許す。」

（史料８）斉明紀５年（659）３月17日条

「甘檮丘の東の川上に、須彌山を造りて、陸奥と越との蝦夷に饗たまふ。」

（史料９）『万葉集』巻第８－1557

故郷の豊浦寺の尼の私房に宴する歌三首

明日香川　行き廻る岳の　秋萩は　今日降る雨に　散りか過ぎなむ

右の一首は、丹比真人國人のなり。

Ⅲ．甘樫丘及び周辺の遺跡

甘樫丘には、邸宅や古墳等と推定される遺跡が点在している。しかし、甘樫丘の丘陵は広大なため、発掘調査の及んでいるのはごく小範囲に止まっている。また、丘陵の西半はすでに大規模な開発がなされており、現状では遺跡の有無さえ明らかではない。ここでは、これまで甘樫丘及びその周辺で確認されている古代遺跡について整理しておきたい。

豊浦寺跡

豊浦寺は、甘樫丘の北麓から北西へのびる尾根の東向きの河岸段丘と飛鳥川の間に営まれた、日本最初の尼寺である。史料からは創建時期や造営経過を確定しがたいが、聖明王献上の仏像を礼拝するため、蘇我本宗家の邸宅あるいは豊浦宮の跡地に建てられたことは認めてよい。

発掘調査では、主軸を地形に合わせて北で西に19度振れた方位の伽藍が確認されている。南から塔・金堂・講堂が並び、講堂の西には回廊状の施設がある。ただし、現在復原されている塔はやや南に離れ、方位も異なることから、金堂のすぐ南に想定する案もある（花谷2000）。伽藍の中で最初に建てられるのは、17×15mの金堂で、600年前後に建立された。その後、第Ⅱ四半期には塔と講堂が建てられる。講堂は現在の向原寺境内にあり、東西30m以上、南北15m以上の規模である（明日香村2000a・橿考研1995）。講堂下層には、南北４間以上、東西３間の掘立柱建物があり、周囲には石敷が施されている。これらは５～６世紀の包含層の上に施工されており、飛鳥Ⅰの段階で廃絶することから、寺院創建以前の建物で、石敷の存在や史料からみて豊浦宮の可能性がある（奈文研1986）。下層遺構は、金堂の下層にも柱穴やバラス敷が部分的に見つかっており、回廊下層にも６世紀後半の石組溝や柱穴がある（橿考研1998）。

甘樫丘東麓遺跡

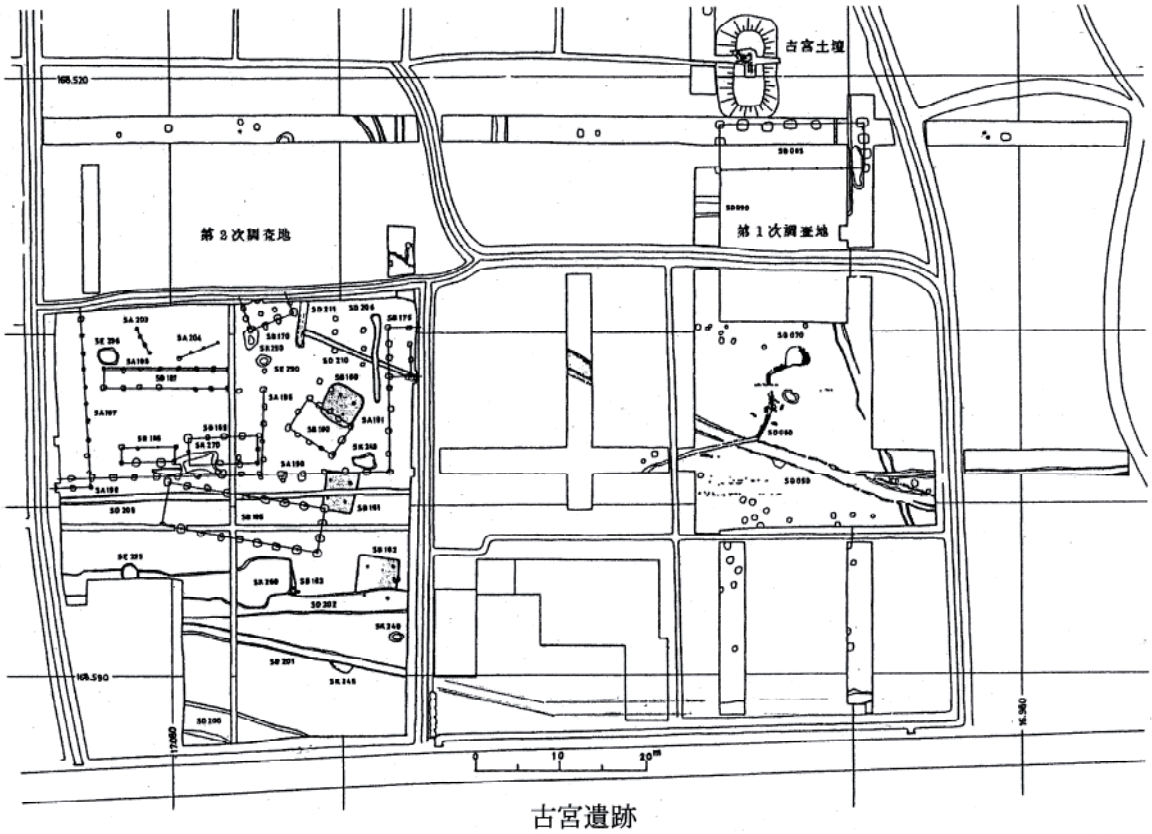
甘樫丘東麓の三方を尾根に囲まれ、南東にひらく6000㎡の平坦地にある。遺構は大きく３時期に区分でき、Ⅰ期は７世紀中頃に廃絶する遺構群である。中央にある谷地形の東側に石垣を積んで、谷の東と西北側に平坦面を形成する。ここに５×３間、５×２間のほぼ同面積の倉庫が建てられている。これらの建物は目隠し塀をともない、他にも掘立柱建物がある。谷の入口の低い部分では、硬化面や掘立柱建物・塀などがあり、焼土や壁土・炭、二次焼成を受けた土器などが出土している。工房施設と理解できるが、製品は特定できない。この時期には尾根の斜面を削り、尾根上には掘立柱塀がめぐる。溝を掘った中に柱を立てる構造は、大壁構造にも共通する。Ⅱ期は２小期に細分されるが、７世紀後半の時期にあたる。いずれも谷頭の西寄りに、一辺約30～35mの方形区画がみられる。内部には４×２間の建物が２棟確認されている。その東側の区画外でも建物がみられる。一方、東側の尾根裾には石敷がめぐる。Ⅲ期は藤原京期で、方位に合わせた建物が１棟だけある。また、一辺約30mのコの字形にめぐる溝がある。遺物としては、豊浦寺や古宮遺跡と同笵の軒丸瓦、川原寺式の軒丸・平瓦が出土している(奈文研1995・2006・2007・2009～2011・2013)。

一方、小さな尾根を隔てた北東側の小規模な谷でも、７世紀中頃に廃絶したと考えられる建物跡や造成の痕跡がみられる。このことから、甘樫丘周辺には７世紀前半から中頃にかけての遺構が広範囲に広がっていることがわかる(奈文研2014)。

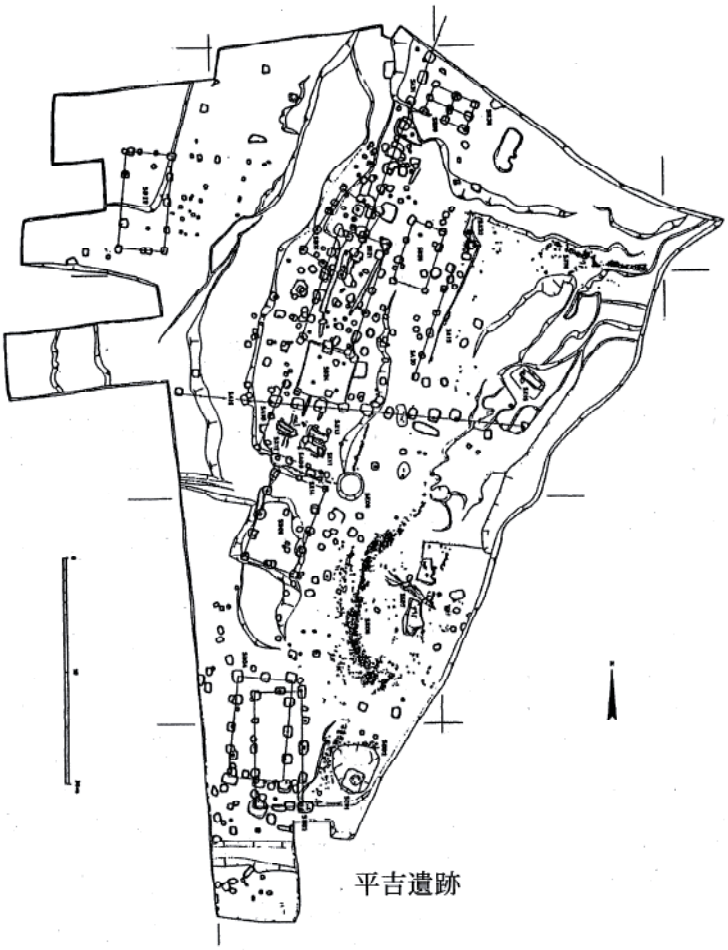
平吉遺跡

甘樫丘北麓の西斜面の緩斜面にある遺跡である。古代の遺構は、出土遺物から数時期の変遷が推定できる。

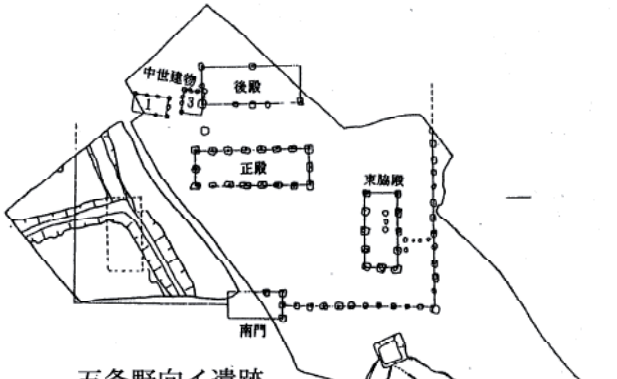
まず調査区の東南からは、５世紀後半から６世紀初頭の埴輪が多く出土している。この中に



古宮遺跡



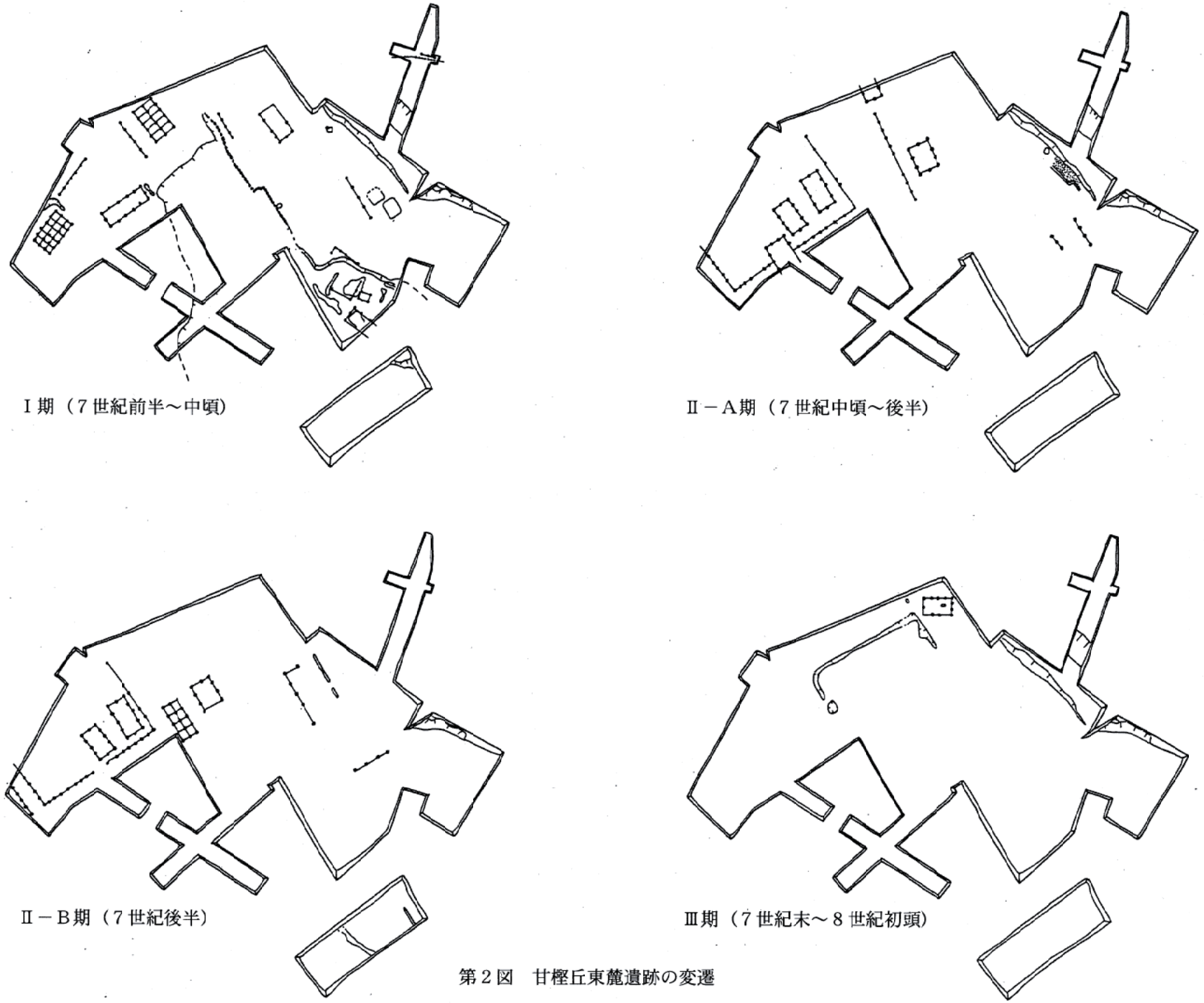
平吉遺跡



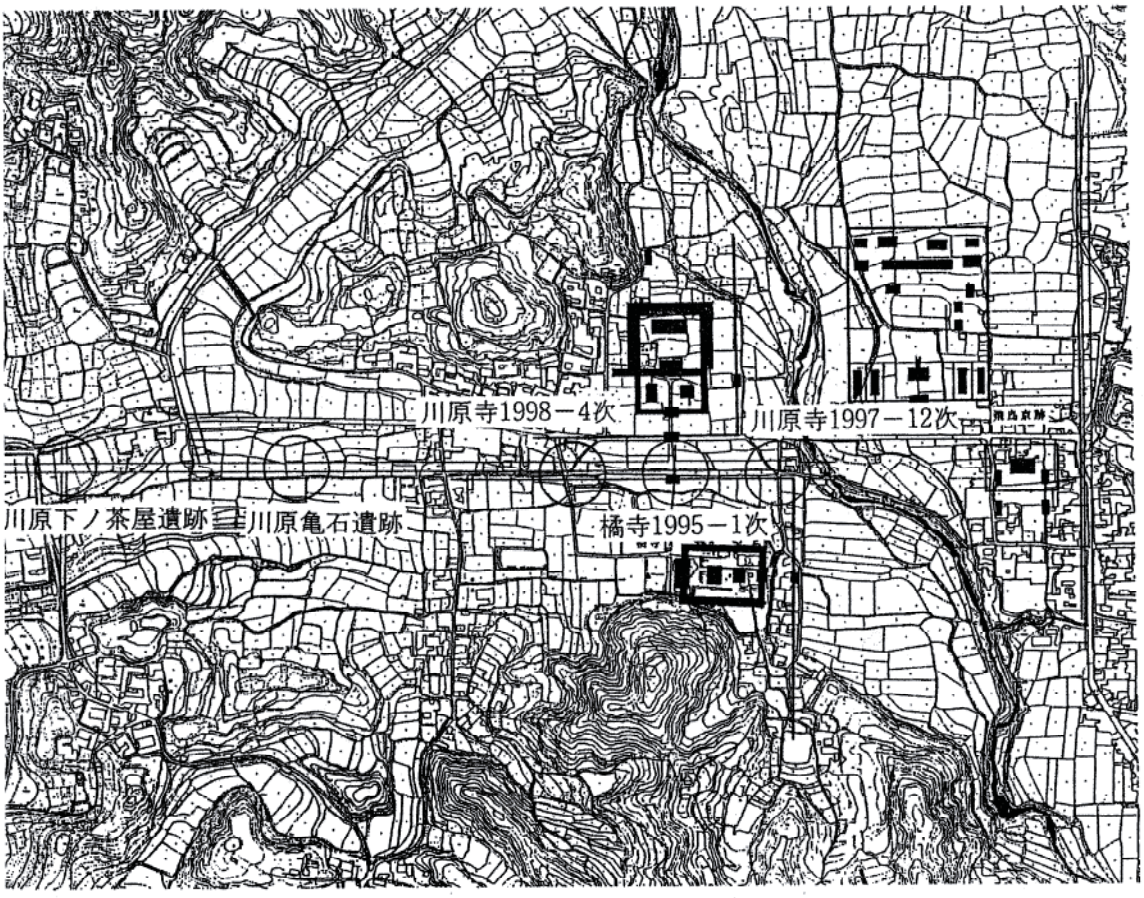
五条野向イ遺跡

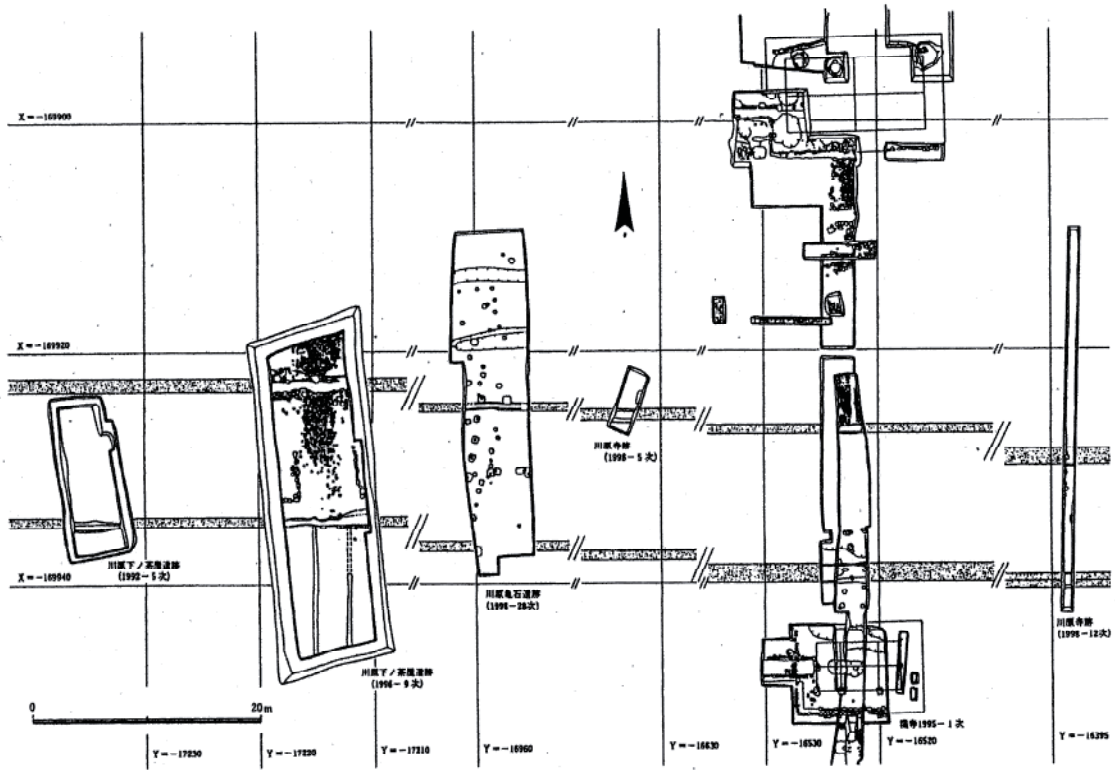
五条野内垣内遺跡

第1図　甘樫丘遺跡群①

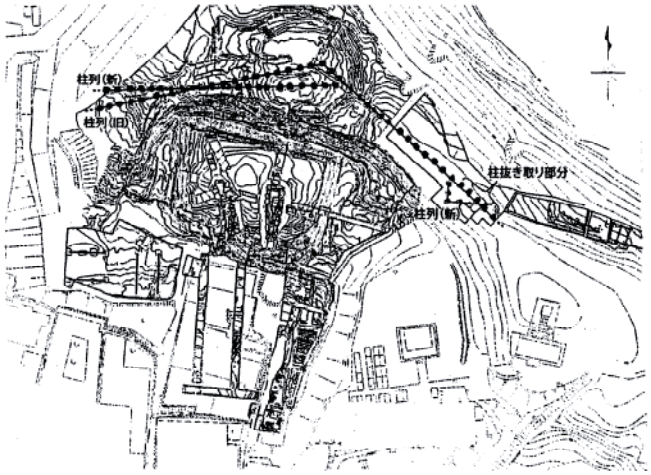


第2図　甘樫丘東麓遺跡の変遷

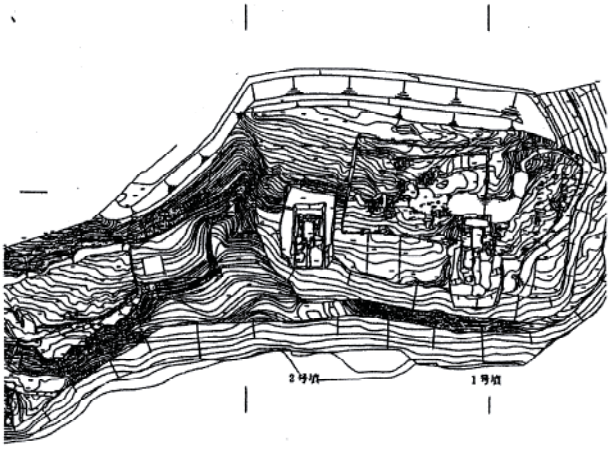




第３図　川原寺・橘寺間の東西道路

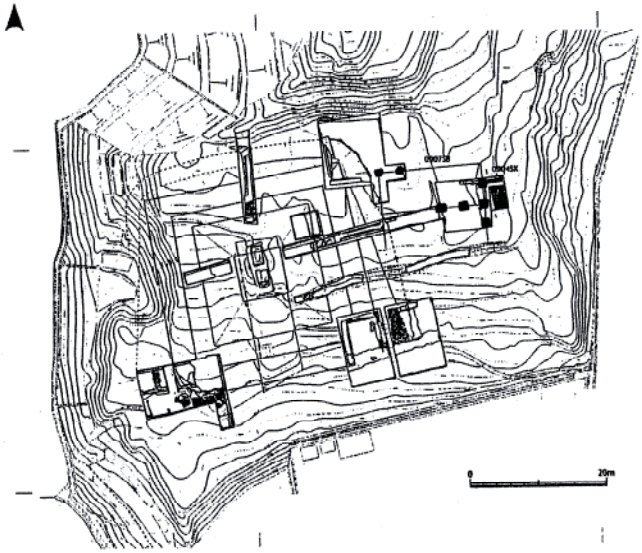


植山古墳



宮ケ原１・２号墳

五条野城脇古墳



菖蒲池古墳

小山田遺跡

第４図　甘樫丘遺跡群②

は、円筒埴輪の他に家・盾・蓋形埴輪も含まれており、南東丘陵上に当該期の古墳があった可能性が高い。続く６世紀後半～末には、一辺4.6～4.7mの竪穴建物１棟がある。この時期の土器が大量に出土することから、本来は他にも遺構があったと推定されるが、確認されていない。７世紀前半には、遺構に伴わないものの、大量の瓦が出土している。軒丸瓦は高句麗系が主体を占めるが、百済系もある。これらの中には、豊浦寺・飛鳥寺・和田廃寺・古宮遺跡と同笵のものがあり、特に豊浦寺所用瓦が多い。このことから、この時期は豊浦寺と密接な関係にあった地域と考えられる。７世紀後半には谷を利用して池状施設が造られ、池の西側斜面を整地して、建物や塀が建てられている。また、炉跡が３基確認されており、フイゴ羽口や坩堝・焼土塊が出土することから、工房あるいはそれに関連する施設と考えられている。その後、奈良時代には、調査区を南北に区画する塀が設けられ、井戸や池を伴う建物も建てられる。この時期には多数の土馬が出土しており、祭祀場として周辺が利用されたとも考えられる。９世紀前半には木棺墓が１基だけある。木棺とそれを覆う木槨からなる。黒色土器や土師器のほか、石帯・砥石、冠の一部と考えられる羅が副葬されていることから、甘樫丘周辺に本貫地をもつ官人の墓と推定されている(奈文研1978)。

五条野向イ遺跡

南東から北西に伸びる尾根を平坦に削平して、建てられている。一本柱塀の区画を復原すると一辺約60mで、その南辺中央には八脚門が設けられる。この門は崖上にあり、ここから南へ里道が南北に下っていることから、谷の下から門へ向かう通路が想定できる。門を入ると正面に７×２間の東西棟正殿、その背後に６×２間の後殿が配置されている。正殿の東には４×２間の南北棟の脇殿がある。西脇殿は削平のため未確認であるが、左右対称に復原でき、南門と正殿の間に広場が存在すると考えられる。建物方位は、北で１度東に振れている。柱掘形から飛鳥Ⅳ、抜き取り穴から飛鳥Ⅴの土器が出土することから、７世紀後半から藤原京期の建物で、皇族あるいは高官の邸宅と推定されている（橿原市1999)。

五条野内垣内遺跡

植山古墳と同一丘陵上で、頂部を平坦に削平し、整地を施して設けられている。一本柱塀の区画は一辺約50mに復原でき、南東隅に八脚門がある。ここから東へ通路状の遺構がある。区画の中央北端に東西棟の四面廂建物がある。この南（区画の中央）に、正殿と西側柱列を揃える６×２間の東西棟建物の前殿、その南に12×２間の長大な前々殿が配置されている。正殿の西と前殿の東には６×２間の南北棟の脇殿が配置されるが、地形の影響で、左右対称にはなっていない。南庭が配置されないことなどから、公的施設ではなく邸宅と考えられる。また、これらの建物群の建設前には、南門・前々殿に重複して、地形に合わせた小規模な建物があり、建築作業小屋的な性格が想定される（橿原市2001b)。

古宮遺跡

明日香村豊浦及び橿原市和田町に広がる遺跡で、かつては小墾田宮の有力な推定地とされていた。豊浦寺とは山田道を隔てた北側に位置し、６世紀以前の施設としては、竪穴建物や井戸などがある。７世紀前半には、古宮土壇のすぐ南に６×３間の東西棟建物とその南の斜行する石組溝、そして小池と石組小溝からなる庭園がある。またその西方では、方位の振れる建物群がある。これらの建物方位の振れは、古山田道に規制されたものと考えられる。古宮遺跡内における「古山田道」は、東半ではほぼ正方位をとるが、西半では西で北に振れている。これに合わせて建物の方位も振れたのであろう。一方、７世紀後半には、いずれも正方位の建物・塀

となる。この時期の「新山田道」は正方位を示しており、これに規制されたと考えられる。藤原宮期の整地上では、掘立柱塀に囲まれた中に、小規模な建物がみられるのみである。なお、古宮土壇は時代が下り、平安時代末以降から中世のものである（奈文研1974・1976）。

川原下ノ茶屋遺跡

明日香村川原にある道路交差点跡。甘樫丘から南西に延びる丘陵と、橘寺から亀石・梅山古墳へとのびる低位丘陵の間に挟まれた谷に位置する。東西道路は路面幅11.5mで、北側溝は石組み、南側溝は素掘りの溝で、いずれも１mの幅をもつ。この道路に交差する南北道路は、南方が両側に素掘りの側溝をもつ路面幅2.7mの道路となる。一方、北方は側溝が確認できないが、幅３mの範囲で南北に榛原石（室生安山岩）が敷き詰められていた。検出状況からみて、路面強化のための地下地業と考えられる。この北側の丘陵上には「旦波國多貴評草上」木簡が出土した小山田遺跡があるので、そこへの進入路と考えられる。東西道路は橘寺北門前など数カ所で確認されており、少なくとも800mは地形を改変してまで一直線に施工されている。飛鳥宮から川原寺と橘寺の間を通過し、下ツ道まで直線で施工された可能性が高い。飛鳥宮に向かう７世後半における幹線道路と考えられる（明日香村1998b）。

五条野丸山古墳

甘樫丘の南辺を東から西へ孤形にのびる尾根は、西端で二手に分かれる。これが堤の部分に該当し、それに挟まれた中に、奈良県内最大の全長318mの前方後円墳である五条野丸山古墳が築造される。前方部は平坦であるが、後円部はこれよりも10mほど高い。墳丘及び周辺の発掘調査はなされていないが、現状を見る限り、埴輪・葺石はみられない。後円部には南に開口する横穴式石室がある。石室床面は墳丘の一段目に設定しており、横穴式石室は玄室長8.3m、幅4.1m、羨道長20.1mで、わが国最大の横穴式石室である。石室の構築方法からみて、平林式に併行する６世紀後半頃の築造と推定される（白石2009）。石室内には２基の家形石棺が安置されている。家形石棺の形態から、奥棺が７世紀初頭、前棺が６世紀後半のものと推定されている（宮内庁1994）。

植山古墳

東南東から西北西へ伸びる丘陵の南斜面にコ字形に周壕を掘削し、不整な直方体に削り出したのち、その上に土を盛って、東西約40m、南北約30mの長方形の墳丘とする。植山古墳築造前には、丘陵頂部に６世紀前半の帆立貝形古墳の植山北古墳が存在し、植山古墳はこれを壊して築造されている。周壕底には、結晶片岩や花崗岩の石敷を施す。埋葬施設は南に開口する横穴式石室が２基併存するが、東石室が墳丘構築と同時に施工されたのに対し、西石室は墳丘構築後に施工されている。ただし、墳丘の増築などがみられないことや位置関係から、当初から二つの石室を設ける計画はあったものと考えられる。東石室は、６世紀末に構築された全長約13.7mの両袖式横穴式石室で、玄室に阿蘇溶結凝灰岩の家形石棺が残るが、棺内からの遺物の出土はない。西石室は、７世紀前半に構築された長約13.0mの両袖式横穴式石室である。玄室と羨道の境界には、竜山石の閾石が据えられている。両石室は、西石室閉塞後に一旦開口し、再び盛土によって丁寧に閉塞されている。これらの点から、改葬が行われたことが指摘されている。墳丘北側の丘陵上には、古墳を囲むように２時期の柱列があり、古い方は地形に沿うが、新しい方は方位に合わせて建て替えられている（橿原市2014）。

五条野内垣内古墳

植山古墳と同一丘陵上、五条野垣内遺跡の南東で検出した古墳である。わずかに古墳の周壕

の北西コーナー部分しか確認されていないので、古墳の形状・規模及び築造時期は明確ではない。周壕の形態からは方墳の可能性が想定される（橿原市2001b）。

五条野城脇古墳

東から西へと延びる尾根の南斜面に、コの字形の周壕を掘削している。すでに石室等は完全に破壊され、まったく残存していない。唯一、石室の内の排水溝と考えられる石詰排水溝が確認されている。これが墳丘の中軸にあるとすると、東西約24m、南北約22mに復原できる。築造時期は特定できないが、周辺からの出土遺物から７世紀前半頃と考えられる。また、石室前面の一段低くなった平坦面に、４×２間の東西棟建物がある。石室の中軸よりもわずかに西によることや、掘形から６世紀末の土器が出土していることから、それ以降の建築であるが、古墳の時期と近いので、喪屋の可能性もある（橿原市2001a）。

五条野向イ古墳

五条野向イ遺跡の邸宅の南東で検出した古墳である。東西約40m、南北約20m以上のコの字形にめぐる溝だけが残存しており、墳丘はない。溝の幅６ｍ、深さ1.2mで方墳と考えられる。溝の埋土から飛鳥Ⅱの土器が出土したことから、７世紀第Ⅱ四半期の古墳と考えられる（橿原市1999）。

宮ケ原１・２号墳

甘樫丘から下弦の月のように西に伸びる丘陵の南斜面に築かれた２基の古墳である。それらをひとつのカット面に並列して並べており、東側を１号墳、西側を２号墳と呼んでいる。１号墳は、石室材が遺存していないが、抜き取り痕跡からみて、奥壁１石、両壁石３石、羨道両壁石４石の両袖式横穴式石室と復原される。玄室長約5.5m、幅2.5mである。石室床面にはバラスが敷かれており、凝灰岩の破片があることから、刳抜式家形石棺が安置されていたと考えられる。一方、２号墳もほとんどの石材が遺存しておらず、抜き取り痕跡からみて、奥壁１石、両壁石３石の両袖式横穴式石室と復原される。わずかに残った石材を観察すると、平坦に加工された１ｍを超える巨石であることがわかる。半切石あるいは切石の横穴式石室で、玄室長約5.5m、幅2.4mと推定される。石室床面にはバラスが敷かれ、凝灰岩の破片が遺存するので、刳抜式家形石棺が安置されていたと考えられる。同一設計のもとで同時期に築かれた可能性が高い。周辺地形からみて、１号墳は30m、２号墳は25m程度の方墳と推定される。石室の構造や切石であることから、７世紀中頃の築造と考えられる（橿原市2001c）。

菖蒲池古墳

東・西・北の三方を尾根に囲まれた中央に築造された。一辺約30mの二段築成の方墳である。墳丘は版築と土嚢積みによって構築されている。掘割は墳丘の東・西・北にコの字形に掘削している。埋葬施設は横穴式石室であるが、両袖かどうかは確定できない。玄室長は7.2mで、この中に２基の家形石棺が直列に安置されている。内面には漆を塗った竜山石である。東外堤にあたる東側尾根の東側斜面には、南北方向の石敷がある。その方位が古墳と一致するため、古墳に関連する一連の施設と考えられる。ここまでを含め、西側を同規模に復原すると、東西・南北80～90mが墓域と想定される。墳丘内から飛鳥Ⅰ～Ⅱ古の土器が出土し、石敷を埋める整地土から飛鳥Ⅱ新が出土することから、７世紀中頃の築造と考えられる。また、掘割及び東外堤の石敷を埋めて、藤原宮期には東西５間、南北４間以上の掘立柱建物が建てられている。古墳築造後、わずか50年も経たないうちに、掘割が埋められ、建物が建築されたことになる（橿原市2015）。

小山田古墳

甘樫丘の南麓から南へ伸びる尾根の先端を削平して築造された古墳である。発掘調査で確認されているのは、尾根を切断して造られた掘割である。溝幅は下幅3.9mで、濠の底及び外面斜面には石英閃緑岩の扁平な石を敷き詰めている。墳丘側の斜面には、結晶片岩の板石を２段、その上には榛原石（室生安山岩）の板石を８段以上積み上げている。板石は10cmずつ内側にずらして積む。濠は延長48mまでは確認しているが、周辺の地形をからは、80m近い方形の古墳と考えられる。造成土から６世紀後半の須恵器、濠の堆積土上層からは飛鳥Ⅳの土器が出土しており、結晶片岩や室生安山岩の使用時期からみて、７世紀中頃の古墳と推定される（ここでは古墳を「小山田古墳」と仮称する）。これらの古墳は、濠の堆積土の状況や上層から７世紀後半の土器が出土すること、そして「旦波國多貴評」木簡が出土し、南に隣接する東西道路からの進入路が想定されることから、７世紀後半には役所や邸宅が建てられていたことが推定される（橿考研2015）。

豊浦火葬墓

昭和19年頃に甘樫丘を開墾していた際、偶然出土した火葬骨臓器である。出土場所は、現在展望台となっている山頂部より約10m南の緩やかな南斜面で、現地から60～70cm下に、木炭の混入した土層があり、その周囲を瓦状のもので囲んでいたという。その中に奈良時代の須恵器の有蓋壺があり、中には骨片に混じって和同開珎１枚が納められていた（網干2003）。

西念寺山瓦窯

甘樫丘の北麓の北へ延びる小支丘の東斜面、豊浦寺の南約200m、平吉遺跡の西約80mの位置にある。地山を刳り抜いた全長５m以上の窖窯である。擁壁の造成工事に伴って発見されたため、窯体の下半だけの調査であるが、検出状況及び地形からみて、南側にもう一基以上ある可能性が高い。軒丸瓦・面戸瓦・熨斗瓦のほか、多数の丸・平瓦が出土している。軒丸瓦は素弁16弁蓮華文・単弁８弁蓮華文・複弁８弁蓮華文が各１点ずつあるが、窯から遊離して出土したため、焼成瓦とは断定できない。よって、時期も特定できないが、位置からみて、豊浦寺との関連が注目される（奈文研1978b）。

Ⅳ. 甘樫丘遺跡群の特質

これまで見たように、甘樫丘及びその周辺には寺院・邸宅（官衙）・古墳など様々な遺跡が展開している。そして、いまだ丘陵全体に調査は及んでいないものの、時代により、性格が変化していることが推定される。以下、各時期の性格について考えてみたい。

７世紀前半の遺跡群

まずは邸宅等の性格について検討する。この時期の甘樫丘周辺遺跡で注目されるのは、甘樫丘東麓遺跡である。1994年の調査で、７世紀中頃に二次焼成を受けた土器とともに、焼けた建築部材・焼土・炭化物などが出土した。その時点では、調査区上方の尾根上にあった建物が火災により焼失し、谷に廃棄物が投棄されたと推定され、甘樫丘という立地と合わせて、乙巳の変に関わる蘇我氏の邸宅との関係が注目されてきた（奈文研1995・飛鳥資料館2000）。

しかし、焼土層に壁土や建築部材は含まれるものの、積極的に火災による焼失を裏付ける証拠は得られていない。その後、谷の入口付近に展開する工房の焼土層から出土した土器と、1994年の調査の焼土層出土土器が接合することが確認され、後者の焼土層も工房に関わる可能性が高まった。したがって、火災による焼土の可能性は低くなっている。くわえて、これま

での調査によると、当遺跡の谷の造成面では、倉庫風の総柱建物等の小規模な建物が複数みられるものの、邸宅中心部にあたるような大型建物群は確認できていない。少なくとも、当地が蘇我氏の邸宅中心部である可能性は低いと考える。ただし、この時期に、谷を造成して石垣を構築し、大規模な雛壇造成を行うなど、その施工主体はかなりの権力をもつ人物であったことが容易に推測される。

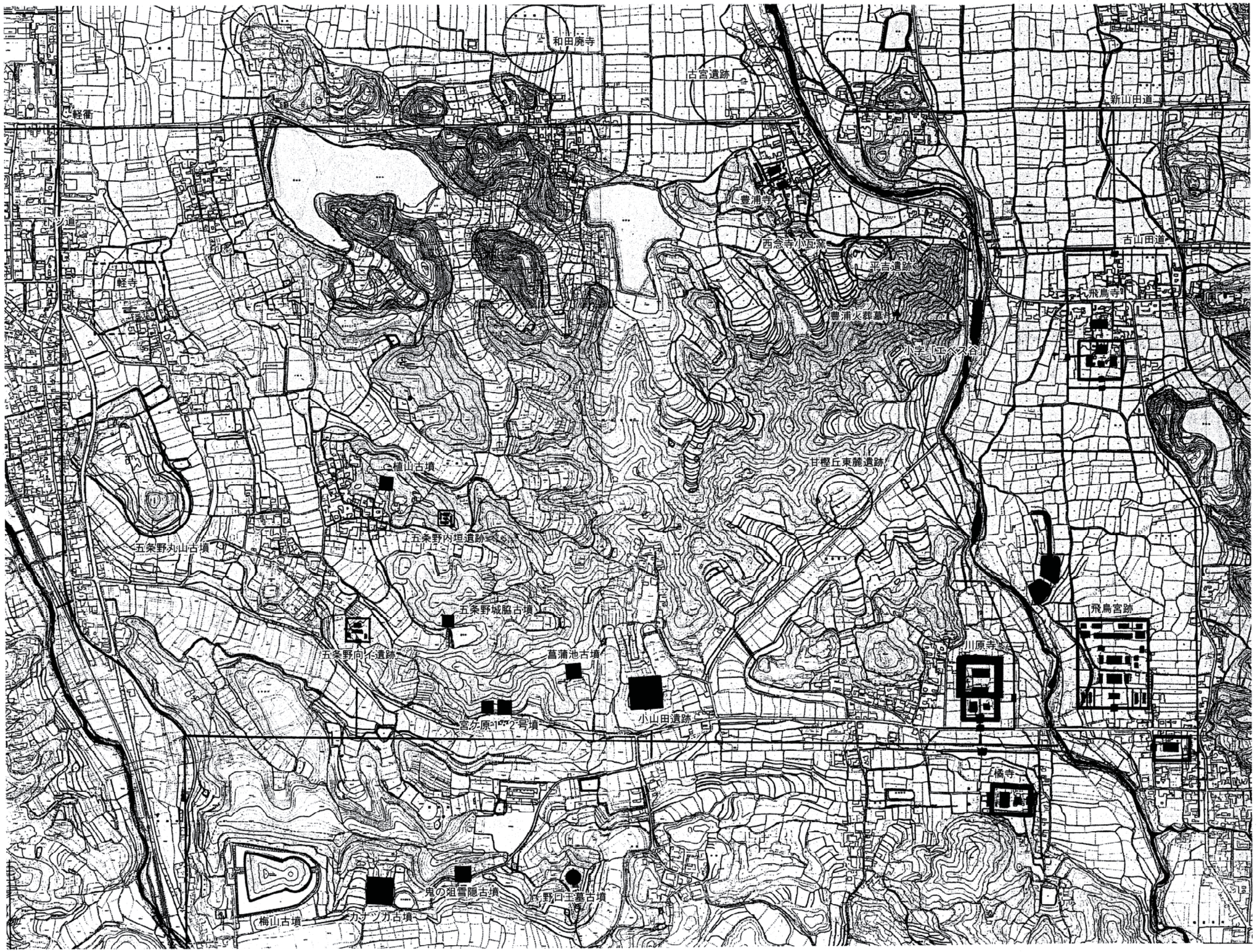
なお、その廃絶時期については、151次ＳＫ160及び157次ＳＫ184出土土器から、飛鳥Ⅰ末～飛鳥Ⅱ古、つまり７世紀中頃であることがわかる。この時期を境に、７世紀後半には掘立柱塀によって区画された公的要素の強い施設群となっている。同様に隣接する谷でも、７世紀前半の造成や建物が確認されており、７世紀中頃に廃絶する。つまり、広範囲にわたって７世紀前半の遺構が営まれ、７世紀中頃に廃絶あるいは性格が変化することがわかる。

では、甘樫丘北麓に位置する平吉遺跡では、どうであろうか。残念ながら、ここでは７世紀前半の明確な遺構は確認されていない。しかし、この時期の豊浦寺所用瓦が大量に出土しており、飛鳥寺・和田廃寺・古宮遺跡と同笵瓦も含まれる。平吉遺跡と豊浦寺は比較的近距離にあるものの、尾根を隔てており、豊浦寺の寺域が平吉遺跡まで広がるとは考えられないが、豊浦寺と密接な関係にあるのは間違いない。『日本書紀』によると、百済聖明王が献上した金銅仏を蘇我稲目が小墾田の家に安置し、向原の家を寺としたと見える。一方、『元興寺縁起并流記資財帳』では牟久原殿に仏殿が設けられ、後に桜井道場、さらに桜井寺に改称されたとする。また、推古天皇の豊浦宮の跡地に蘇我蝦夷が豊浦寺を建立したとされている。いずれにしても、豊浦寺が蘇我本宗家と密接な関係にあったことは間違いない。

一方、古宮遺跡は従来、推古天皇の小墾田宮の推定地とされてきた。発掘調査でも７世紀前半の庭園遺構が見つかっており、宮殿中心建物群は確認されなかったものの、その推定地となっていたのである。しかし、1987年に、飛鳥川を隔てた東側の、雷丘東方遺跡で「小治田宮」墨書土器が出土し、奈良時代の小治田宮は雷丘周辺にあったことが確定した（明日香村1988・相原1999）。そして、推古朝の小墾田宮もその周辺に推定されるようになっている[2)]。こうした調査研究の進展により、古宮遺跡の性格が問題となるが、豊浦地域で庭園をそなえた７世紀前半の遺跡であることから、蘇我蝦夷に関わる遺跡の可能性が高い。蝦夷は豊浦大臣とも呼ばれ、豊浦地域に一時期邸宅を構えていたことは間違いないので、その有力な候補地であろう。このように、甘樫丘北麓及びその周辺の遺跡や寺院跡は、いずれも蘇我氏と関連のある施設群といえる。

ここで、史料にみえる蘇我本宗家の邸宅群の位置を確認しておきたい。蘇我氏が最初に居住した邸宅は、現在の橿原市曽我町とされる。ここには、蘇我馬子が創立したという伝承を残す宗我坐宗我都比古神社が鎮座するが、現段階では、邸宅に関わる遺跡は確認されていない。その後、蘇我氏は畝傍山から飛鳥へと、その勢力範囲を東方へ広げていった。

蘇我稲目に関わる邸宅としては「小墾田の家」「向原の家」そして「軽の曲殿」があげられる。「小墾田の家」は、『日本書紀』欽明13年（552）の記事に、欽明天皇から拝領した仏像を最初に安置したみえる邸宅である。先述のように、推古天皇の小墾田宮は、現在では飛鳥川右岸の雷丘東方に推定されるので、稲目の小墾田の家もその近辺に想定される。一方、「向原の家」は先の記事に続き、向原の家を浄めて寺としたとされ、現在の豊浦寺、つまり飛鳥川左岸の豊浦に推定される。なお、「軽の曲殿」は、「軽の街」が下ツ道と山田道の交差点である橿原市石川町近辺に推定されているが、未だ関連する遺跡は見つかっていない。



第５図　甘樫丘とその周辺の遺跡

次の蘇我馬子の時代になると、「石川の宅」「槻曲(つきくま)の家」「嶋の家」が記録にあらわれる。「石川の宅」は敏達紀13年（584)、そこに仏殿を建てたとみえる。推定地は現在の橿原市石川町とされ、仏殿を石川精舎に当てている。「槻曲の家」は用明紀２年（587）に大伴比羅夫連が馬子を警護するさいに登場する。橿原市西池尻町軽古にある軽樹村坐神社付近、あるいは稲目時代の「軽の曲殿」と同じものと推定され、いずれにしても橿原市大軽町から見瀬町にかけての地域と考えられる。馬子の邸宅は推古紀34年（626）の記事に「飛鳥河の傍に家せり。乃ち庭の中に小なる池を開れり。仍りて小なる嶋を池の中に興く。故、時の人、嶋大臣と曰ふ」とあることから、飛鳥川沿いに庭園をもつ邸宅を設けていたことがわかり、明日香村島庄に推定されている。これについては、後に記す島庄遺跡がその有力な候補地となる（相原2011)。

蘇我馬子が「嶋大臣」と呼ばれたのに対して、蘇我蝦夷は「蘇我豊浦蝦夷臣」「豊浦大臣」と呼ばれており、蝦夷の邸宅が豊浦にあったことがわかる。640年代には、蝦夷・入鹿は甘樫丘に邸宅を築く。皇極紀３年（644）には蝦夷の邸宅を「上の宮門(うえのみかど)」、入鹿の邸宅を「谷の宮門(はさまのみかど)」と呼んだと記されている。また、畝傍山の東にも蝦夷が邸宅を建てたことが見え、いずれも防備が堅い邸宅であった。

このようにみると、蘇我氏に関わる邸宅群は下ツ道と山田道の交差点である軽の街から山田道沿線上に転々と配置されていることがわかる。こうした傾向は蘇我氏に関連する寺院にも共通し、石川精舎・和田廃寺（葛城寺)・豊浦寺・飛鳥寺・奥山廃寺（小墾田寺)・山田寺が沿線上に並んでいる（大脇1997)。蘇我氏は山田道を軸に拠点を置いていたこと、皇極３年（644）にその本拠を甘樫丘に移したことが指摘できる。

そこで再び甘樫丘東麓遺跡をみると、瓦の出土数はそう多くないものの、豊浦寺や古宮遺跡と同笵の軒丸瓦がある。これらのことから、甘樫丘東麓遺跡と平吉遺跡、古宮遺跡、そして豊浦寺・和田廃寺・飛鳥寺は、互いに密接な関係があったと考えられる。豊浦寺・和田廃寺・飛鳥寺はいずれも蘇我氏の氏寺であり、古宮遺跡は蘇我蝦夷の邸宅の可能性が指摘されている。甘樫丘東麓遺跡と平吉遺跡も、蘇我氏に関わる遺跡と理解するべきであろう。

以上のように、甘樫丘及びその周辺には７世紀前半の寺院・邸宅等が確認されているが、いずれも蘇我氏との関わりが深い。つまり、この時期は、甘樫丘全域が蘇我氏の支配下にあったとみてよい。では、蘇我本宗家の居宅はどこにあったのであろうか。甘樫丘における発掘調査地点は極めて限定的で、全貌は明らかではなく、未調査地に存在していた可能性が高い。そこで注目されるのが、甘樫丘頂上の展望台から東へ向かう小規模な谷に、「エベス谷」の小字が遺存することである。蘇我蝦夷の邸宅は「上の宮門」と呼ばれ、丘陵上方にあったと推定されるが、「エベス谷」が「蝦夷の谷」の転化であるとすると、このあたりが有力な候補地となろう。また、甘樫丘東麓遺跡から、飛鳥板蓋宮（飛鳥宮跡）は目視できないが、甘樫丘頂上からは、飛鳥板蓋宮も飛鳥寺も眼下に望むことができる。立地からみても有力な候補地と考える（相原2007・2009)。

７世紀前半の古墳群

この時期の古墳は、甘樫丘の西から南辺にかけて存在する。６世紀後半まで目を広げると、この地域にはじめて造られる古墳は、五条野丸山古墳である。五条野丸山古墳の堤にあたる尾根は、甘樫丘から尾根続きに立地しているが、ここまで「甘樫丘」あるいは「大野丘」と呼ばれていたかは明らかではない。筆者は後に記すように、ここは「軽」と呼ばれていた地域に含

まれると考えている。いずれにしても、五条野丸山古墳を起点としながら東へと古墳が築造されたと考えられる。五条野丸山古墳の被葬者については、欽明天皇とみるか蘇我稲目とみるかで、研究者間に意見の対立があり、それは同時に梅山古墳の被葬者を、欽明天皇と蘇我稲目とみるか、という問題にもつながっている。そこで、改めて両古墳の概要を整理しておきたい。

五条野丸山古墳は全長318mの前方後円墳で、周溝及び堤をもつ。埋葬施設は巨大な横穴式石室で、奥に7世紀初頭の家形石棺、手前に6世紀後半の家形石棺が安置される。石室はその形態から、前棺と同時期の6世紀後半の築造と推定されている。一方、梅山古墳は全長140mの前方後円墳で、周溝及び堤をもち、背後にはコの字形に巡る尾根がある。墳丘は発掘調査の結果、埴輪はないものの葺石（貼石）が確認されている。出土土器から、6世紀後半の築造と推定される。埋葬施設については明らかになっていない（宮内庁1994・1999）。

ここで重要なのは、蘇我稲目が亡くなったのが570年、そして欽明天皇が崩御したのは571年で、両者の差はわずか1年にすぎない点である。寿陵の可能性を考慮しても、その差を古墳の年代から識別することは困難である。また、墳丘規模の違いについても、当時の欽明天皇と蘇我稲目の力関係をどのように理解するかによって、解釈が変わることになる。

では、両者をどのように考えればよいであろうか。『日本書紀』には蘇我稲目墓に関する記事はない。しかし、欽明天皇陵については『日本書紀』に幾つかの記事がみえる。欽明天皇は欽明32年（571年）4月に崩御し、9月に檜隈坂合陵に埋葬された。そして、推古20年（612年）2月に、妃であった堅塩媛を檜隈大陵に改葬し、軽の街で誄の儀式を行っている。推古28年（620年）には、砂礫を檜隈陵の上に葺き、周囲に土を積んで山をつくり、氏ごとに大柱を土の山の上にたてさせている。また、皇極2年（643年）9月には、吉備姫王を檀弓岡に葬ったとあるが、その檜隈墓は『延喜式』に檜隈陵域内と記載されている。

これらの記載は、梅山古墳が6世紀後半の築造であること、墳丘に葺石（貼石）がみられること、明和8年（1771）に梅山古墳南側の小字「池田」から大柱が見つかっていること、檜隈墓（吉備姫王墓）が梅山古墳の東に隣接するカナヅカ古墳と推定できることなど、梅山古墳に符合する点が多い。一方、五条野丸山古墳については、推古20年の堅塩媛の改葬を、奥棺と理解することも可能ではあるが、その場合は、欽明天皇の石棺を手前に動かし、堅塩媛の石棺を奥に据え直したとしなければならない。いかに蘇我氏の権力が強いといえども、天皇の棺を手前に移動させるのは難しい。五条野丸山古墳が欽明天皇陵と考える研究者も多い（猪熊1992・白石2009・高橋2004・2005・2012・土生田1999・増田1991・1996・2001・森1965など）ものの[3)]、上記の点は明らかに蘇我稲目説に有利であり、五条野丸山古墳＝蘇我稲目説とする研究者によってもすでに指摘されており、欽明天皇陵は梅山古墳とみるべきであろう（斉藤1966・安本1992・和田1995・2005・小澤2002b）。

それに加えて、さらに2点指摘できると考える。1点目は、「檜隈」の範囲の問題である。欽明天皇陵は「檜隈坂合陵」と呼ばれ、古代の「檜隈」地域にあったことがわかる。この他に「檜隈」を冠した陵墓は檜隈大内陵（天武・持統天皇陵）、檜隈安古岡上陵（文武天皇陵）がある。前者は野口王墓、後者は中尾山古墳に比定され、梅山古墳の東方、あるいは南東に位置している。よって、野口王墓までは「檜隈」の範囲内であることは間違いなく、梅山古墳も「檜隈」内となる。問題は、五条野丸山古墳まで「檜隈」に含まれるかである。

そこで注目したいのは、7世紀後半に築道された東西道路である。この道は下ッ道から直線で東に進み、川原寺と橘寺の間を通過して、飛鳥川を渡ると、飛鳥宮へと至る。この直線道路

を境に、北が川原、南が橘という地域名称であったことは、現在の地名（大字）の境界や地名に基づく寺院の名称（川原寺と橘寺）からも補強される。同様に、「小墾田」と「飛鳥」の境界は古山田道とみられる（相原2013）。これに限らず、古代の幹線道路が地域名称の境界になっている事例は多く、下ッ道に近い部分では、この東西道路の南が「檜隈」、北が「軽」であったと推測される。よって、７世紀中頃以降は直線道路が地域名称の境界としていたと考えられるが、７世紀前半以前は何をもって、境界としていたのであろうか。それはおそらく山や谷、河川などの自然地形であったと考えられ、梅山古墳と五条野丸山古墳の間にある谷が地域名称の境界になっていた可能性が高い（相原1998）。

このことは兆域の視点でも追認できる。『延喜式』諸陵寮によると、檜隈坂合陵の兆域は「東西四町。南北四町」と記され、その陵域内に檜隈墓があるとされる。「東西〇町、南北〇町」という表現から矩形のようにみえるが、現地で確認すると、これは複雑な地形に影響された景観的領域の範囲と一致しており、東西及び南北の最大値で示したことがわかる。以上のように理解すると、梅山古墳の西の尾根から、カナヅカ古墳と鬼の俎雪隠の間の尾根までが４町、梅山古墳の北の尾根から南の尾根までも４町になる。そして、この範囲内に７世紀中頃のカナヅカ古墳が含まれる。これらの点は、檜隈坂合陵の兆域や檜隈墓（吉備姫王墓）の記載と一致する。ちなみに、檜隈大内陵（野口王墓）や檜隈安古岡上陵（中尾山古墳）の兆域についても、同様の理解にたてば、整合的に理解できる（相原2012）。

上記のような視点で五条野丸山古墳をみるとどうなるだろうか。兆域に緘しては堤部を含む範囲とも理解できるが、檜隈墓を兆域内には想定することはできない。

以上の点からも、梅山古墳が欽明天皇と改葬後の堅塩媛を埋葬した檜隈阪合陵、五条野丸山古墳が蘇我稲目と改葬前の堅塩媛を埋葬した墓である可能性は高い。なお、近年、蘇我稲目墓の候補地として新たに都塚古墳が指摘されているが、白石太一郎氏が指摘するように（白石2015）、この比定には問題が多く、五条野丸山古墳の位置づけについても説明が求められる[4)]。

五条野丸山古墳の東500mには植山古墳が築造されている。石室の主軸は異なるが、墳丘と石室の位置関係から、当初より双室墳として計画されたと考えられる。東石室は６世紀末、西石室は７世紀前半のものであるが、石室内はいずれもきれいに片付けられており、特に西石室には棺は残されていない。また、閉塞後に一旦開口し、再び丁寧に土で密閉している。これらのことから、植山古墳は改葬されて空墓になっている可能性が高い。さらに背後の尾根上には藤原京期まで二時期の掘立柱塀が巡っており、空墓になった古墳を適切に管理していたことが窺われる。そして、先にも記したように、この地が甘樫丘（大野丘）の一角に位置することは重要である。

この条件を満たす人物として、竹田皇子と推古天皇があげられている。推古記26年（618）には「御陵は大野の崗の上に在りしを、後に科長の大陵に遷しまつりき」と見え、推古天皇の初葬陵は「大野丘」にあったが、後に河内の推古天皇陵・磯長山田陵（山田高塚古墳）へ遷したことがわかる。さらに「朕が為に陵を興てて厚く葬ること勿れ。便に竹田皇子の陵に葬るべし」と、竹田皇子との合葬が遺詔されている。これらが、調査成果とも一致するので、植山古墳を推古天皇と竹田皇子の初葬陵と考えてよい（竹田2001）。

一方、五条野内垣内古墳は、植山古墳から春日神社を隔てた東側にある。周濠の一部しか確認されていないが、藤原京期の五条野内垣内遺跡の建物群よりも古く、これらの建築時には削平されていた可能性が高い。しかし、古墳の築造時期や規模等を特定できないので、被葬者や

性格を推定する材料に乏しい。

五条野向イ古墳も同様に、五条野向イ遺跡の建物群に隣接する東西40mのコ字形の周溝から、一辺40mの方墳と復原できるが、埋葬施設は明らかではない。また、溝埋土から飛鳥Ⅱの土器が出土することから、その頃には埋没しており、少なくとも７世紀後半の建物群の時期には削平されていたと考えられる。やはり被葬者像を特定するのは困難である。

五条野城脇古墳は、墳丘及び掘割の一部が確認されただけであるが、約24m程度の方墳と復原される。出土遺物から７世紀前半の古墳とみられるが、これ以上のデータがない。

宮ケ原１・２号墳は、ひとつの背面カットの中に二つの墳丘が築かれているのが特色である。石室の石材の多くが抜かれており、詳細は明らかではないが、半切石を使用した両袖式の横穴式石室であることはわかる。東の１号墳が30m、西の２号墳が25m程度の方墳と推定されている。築造時期は７世紀中頃と推定され、被葬者については蘇我蝦夷・入鹿の大陵・小陵という説もあげられている（竹田2001）。しかし、後に検討する小山田古墳と菖蒲池古墳を、大陵・小陵とみるべきであり、現段階では被葬者の特定はできないと考える[5)]。

菖蒲池古墳は、三方を山で囲まれた一辺30mの古墳である。藤原京中軸線上に位置することから、藤原京との関係が考えられたこともあったが、築造時期が７世紀中頃であることから、天武持統陵とは異なり、偶然の産物である。被葬者については、五条野古墳群の位置づけから、649年に死去した蘇我倉山田石川麻呂と興志であるという理解がある（竹田2001）。しかし、蘇我倉山田石川麻呂は謀反の疑いをかけられて自害したものの、潔白であることが判明し、その後は丁寧な扱いをされる。それらは山田寺の造営が朝廷によって継続されることからも窺える。後述するように菖蒲池古墳の下段が埋められてしまう行為とは、一致しない。次に検討する小山田古墳を踏まえると、被葬者は蘇我入鹿の小陵と考えるべきである。被葬者像を考える材料となるのは、掘割の埋め戻しと、その後に建てられた掘立柱建物の存在である。古墳築造後わずか20～30年後に掘割が埋められており、藤原京期には建物が建てられている。こうした状況は隣接する小山田古墳と共通するもので、両者は時を同じくして築造され、同じ歴史を歩んだことになり、極めて関連性が高い。唯一の違いは、菖蒲池古墳は下段こそ埋められてしまうが、上段は残されたという点である。

菖蒲池古墳の東隣接地に小山田遺跡がある。発掘調査で確認したのは古墳の掘割と考えられる石貼りの大溝だけであり、調査で確認した遺構はごく一部に過ぎない。豪族居館や宮殿・役所の濠の可能性も残されるが、遺構の時期が６世紀後半から７世紀後半までで、榛原石の利用状況から７世紀中頃の可能性が高いこと、５～６世紀の豪族居館の場合、周囲に石張りの溝を巡らす事例もあるが、７世紀代にはみられないこと、飛鳥の宮殿でさえ、最大でも幅2.5mの石組溝しかないことから、宮殿や役所・邸宅は考えられず、古墳の可能性が高い。なお、同じような立地で、類似した遺存状況を示すものとして、カナヅカ古墳がある。ここでも、三つの尾根のうち中央の尾根を削平・造成し、一辺50mの方形壇を造成している（明日香村1996・1998a）。現在でも高まりが残されているが、この上に一辺35m程度の墳丘が載るものと復原される（西光2000）。よって、小山田遺跡は調査を担当した橿原考古学研究所が発表したように古墳とみて問題はなく、周辺に遺存する地形を考慮すると、最大80mちかい古墳となる可能性がある。

橿原考古学研究所は、古墳規模が極めて巨大なこと、築造が７世紀中頃と推定できること、墳丘外装に榛原石を積み上げていることから、641年10月に崩御した舒明天皇の初葬陵と推定

している。最大の根拠とされたのは、榛原石の使用状況が段ノ塚古墳（舒明天皇陵）と酷似することである（宮内庁1995）。舒明天皇は642年12月に「滑谷岡」に葬られたと『日本書紀』は記す。滑谷岡は、明日香村大字冬野にあったという伝承もあるが、冬野は山間部で、終末期古墳を築造するような立地ではない。他所に求めるべきであろう。注目すべきなのは、今回の見つかった掘割が７世紀後半には埋没していることである。次項でも検討するように、墳丘は削平され、「旦丹波國多貴評」荷札木簡をともなうような性格に変化することである。濠の埋没状況からみて、榛原石の石積みは比較的短期間のうちに崩壊（破壊）し、濠は埋められている。そして、墳丘部を削平し、建物が建てられる施設に二次利用されたのである。とすれば、天皇が初葬陵から改葬されて空墓になった後に、墳丘を削平して他の施設に転用するだろうかという疑問が生じる。しかもその時間幅はわずか30～40年後である。

空墓となった天皇初葬陵の管理状況を窺う際に参考となるのが、植山古墳である。植山古墳は、先述のように、推古天皇と竹田皇子の墓とされている。改葬後には石室入口を丁寧に土で埋め戻しており、背後の尾根上を掘立柱塀で区画し、管理している。こうした状況こそ、律令期陵墓の改葬後の初葬陵（空墓）の管理形態の一例と理解できる。それに対して、小山田古墳は、天皇初葬陵としては管理形態があまりに異なる。むしろ、甘樫丘の南端という立地と築造時期、規模、そして歴史的な背景から考えると、蘇我蝦夷の大陵とみなすべきであろう。

『日本書紀』皇極元年（642）には「盡に國學ね民、并て百八十部曲を發して、預め雙墓を今来に造る。一つをば大陵と曰ふ。大臣の墓とす。一つをば小陵と曰ふ。入鹿臣の墓とす」とあり、蘇我蝦夷・入鹿の墓を並べて寿陵として造ったこと、前者を「大陵」、後者を「小陵」と呼んだことが記されている。そして、皇極４年（645）の乙巳の変において、蘇我入鹿を板蓋宮で暗殺し、それをみた蘇我蝦夷も甘樫丘の自宅で自害した。そののち、蝦夷・入鹿を墓に葬ることは許したことが見える。このことから、蝦夷・入鹿は古墳に葬られたと考えてよいが、大陵・小陵に埋葬されたかどうかは明確ではない。むしろ、小山田古墳のように、極めて巨大な古墳に埋葬することが許されたとは考えがたい。ここで注目されるのが、隣接してある菖蒲池古墳の石室に２棺の家形石棺が安置されていることである。本来、小山田古墳と菖蒲池古墳に埋葬されるべき被葬者を、菖蒲池古墳に二人とも埋葬したとみてよいのではないか。一方、小山田古墳は墳丘を削平し、濠を埋めたてたのであろう。菖蒲池古墳の掘割が埋められる時期もほぼ同じで、二段築成の方墳は、結果的に一段の約20mの古墳にしか見えなくなったのである。小山田古墳と菖蒲池古墳の造営方位がほぼ一致することも、両者に関連性があることを示しており、以上の検討を踏まえると、次のような推定が可能なる。すなわち、小山田古墳は、蝦夷の大陵として築造されたが、結果的にはここに埋葬されず、菖蒲池古墳に蝦夷・入鹿を埋葬した。そして、小山田古墳は墳丘を削平し、菖蒲池古墳は掘割を埋めて、小さな古墳に見えるように改変された[6]。その背景には、乙巳の変という歴史的事件が絡んでいると考える。

ここまでみた６世紀後半から７世紀前半までの古墳のうち、被葬者像の推定できるものを示すと、初葬陵も含めて蘇我氏本宗家及び密接に関わる人物の古墳であることがわかる。性格を特定できない古墳もあるが、その中でも蘇我氏に関わる古墳が大半を占めるのは間違いがないであろう[7]。こうした状況は７世紀前半の遺跡群の性格とも共通する。

７世紀後半の遺跡群

７世紀後半になると、この地域の遺跡はどのように展開するのであろうか。この時期に新た

な古墳の築造はない。終末期後半の古墳は、野口王墓をはじめ、さらに南の檜隈地域以南に築造される。

まず、古宮遺跡では、７世紀前半の庭園遺構が廃絶し、正方位の建物群が建てられる。これは、南に隣接する新山田道に沿うものである（相原2013）。その性格は特定できないものの、庭園が廃されることから、大きな転換があったことがわかる。一方、甘樫丘北麓の平吉遺跡では、谷を利用して池状施設が造られ、池の西側斜面を整地して建物や塀が建てられている。また、炉跡が３基確認され、フイゴ羽口や坩堝焼土塊が出土することから、工房あるいはその関連施設と考えられており、豊浦寺との直接的な関連は薄くなる。甘樫丘東麓遺跡では、それまでの施設を撤去して全体を整地で覆い、掘立柱塀で囲んだ区画が谷の北西部に造られる。性格は特定できないものの、区画が二時期あることや、整然としている配置から、公的施設の可能性が高いと考える。

では、甘樫丘南辺に展開する遺跡はどうであろうか。この時期には、植山古墳と同一尾根に五条野内垣内遺跡、南の尾根に五条野向イ遺跡がある。いずれも丘陵上を平坦に造成し、邸宅あるいは公的施設を設けている。注目されるのは、少なくともその造営段階には、五条野内垣内古墳や五条野向イ古墳が削平されていることである。これは後に検討する菖蒲池古墳や小山田古墳との関連においても興味深い。このうち五条野向イ遺跡の南門は丘陵の南崖上にあり、そこから南へ下る中軸線上には里道がある。これが、南門へと登る通路と考えられる。一方、植山古墳では、古墳の周囲が掘立柱塀によって区画され、すでに記したように、藤原京期になっても、空墓の管理が行き届いていることがわかる。

小山田遺跡は、本来古墳として築造されたと考えられるが、墳丘の推定位置は昭和30年代の地図をみると約80mの方形の平坦面となっていること、墳丘に積まれていた榛原石が倒壊し、７世紀後半には掘割が完全に埋められていること、周囲で「旦波國多貴評」荷札木簡が出土していることから、役所あるいは邸宅があった可能性が高い。これは、すぐ南の谷底で検出された川原下ノ茶屋遺跡の道路遺構の道路交差点が示す状況からも追認できる。交差点の南北道路は、まさに小山田遺跡へと向かう進入路であり、築道時期は７世紀後半である。同様の例は、先にみた五条野向イ遺跡でも推定されている。また、小山田遺跡の方形地割の方位は道路遺構と一致しており、古墳の掘割の方位とは微妙に異なる。それは、この時期に小山田遺跡が改変されたことを間接的に物語るが、小山田遺跡は古墳を削平し、二次利用しているのである。同様に、菖蒲池古墳も掘割と下段墳丘が埋められ、かろうじて墳丘上段の削平は免れたものの、すぐ近くまで建物が建てられている。建物は一棟だけなので、性格は特定できないが、小山田遺跡の施設群の一部とも理解することができようか。

このように、７世紀後半の甘樫丘では新たな古墳の築造はなくなり、多くの古墳が削平あるいは埋め戻しをされて建物群が建てられる。邸宅あるいは公的施設になったものが多い。蘇我氏滅亡後は、その領地が没官地になったと考えられ、飛鳥の都市化が甘樫丘を含む広範囲に拡大されたことになる。ただし、この都市化の波の中でも、破壊を免れた植山古墳は適切な管理がなされ、五条野丸山古墳も削平を免れている。その理由も被葬者論と合わせて重要である。

８世紀以降の遺跡群

奈良時代になると甘樫丘の遺跡は急速に衰退し、顕著な遺構は確認されない。平吉遺跡ではまだ建物群が残るが、土馬が多く出土しており、水に関わる祭祀が行われていた可能性が高い。

また、丘陵頂部近くでは、和同開珎等を入れた火葬骨臓器が出土しており、都が奈良へと遷った後の甘樫丘での生活痕跡は乏しい。

9世紀前半には平吉遺跡で木棺墓が確認されており、甘樫丘周辺に本貫地をもつ官人の墓と考えられる。また、甘樫丘東麓遺跡でもこの時期の建物が2棟確認できるが、他には確認されていない。そして、近世以降には段々畑の水田・山林へと変化をしている。

V. 総括－甘樫丘をめぐる遺跡の動態－

以上のように、甘樫丘のこれまでの調査成果をみると、遺跡が多く展開するのは6世紀後半～7世紀であり、中でも7世紀中頃に大きな画期があったとみられる。

甘樫丘での調査事例は少ないが、7世紀前半には、周辺の遺跡を含めて、いずれもが蘇我氏と密接な関係がある遺跡で、少なくとも640年代には丘陵そのものが蘇我本宗家の支配下にあったと考えて間違いない。古墳についても同様の指摘ができ、蘇我氏の奥津城であった可能性が高い。

このように考えると、蘇我本宗家の邸宅と奥津城の関係がスムーズに理解できる。蘇我稲目の邸宅は複数存在したが、軽の曲殿が中心であった。そして、その奥津城は五条野丸山古墳であり、本拠とする地に邸宅と墳墓を造営したことになる。同様の例は蘇我馬子の嶋家と桃原墓(石舞台古墳)、蘇我蝦夷・入鹿の甘樫丘と大陵・小陵（小山田古墳・菖蒲池古墳）にもみられる。蘇我本宗家は邸宅と墳墓を同一地域に築いたことがわかる。

では、蘇我氏はなぜ、甘樫丘に邸宅を建てたのであろうか。注目しなければならないのは、飛鳥寺が造営された位置である。地形的には、のちに飛鳥宮が代々造営された飛鳥寺南方のほうが、立地や広さの点で優れている。その一方、飛鳥寺の建つ場所は、西に甘樫丘があり、東からも丘陵がのびており、飛鳥寺はまさに飛鳥への北の入口を塞ぐように建造された（小澤2002a)。つまり、飛鳥宮の空間は当初から予定されていたのである。しかし、推古天皇の宮殿はまだ、飛鳥寺北方の豊浦宮や小墾田宮であった。飛鳥の中枢部に宮殿を造営するのではなく、山田道沿いにある蘇我氏の邸宅に宮を造ったのであり、舒明朝になってはじめて飛鳥寺の南方、蘇我氏の懐に入っていく。そして皇極朝になって蘇我氏は要塞のような邸宅を甘樫丘に造営する。甘樫丘を山城にすることは、外敵から飛鳥、そして飛鳥宮を防衛するのには極めて有効である。くわえて、甘樫丘はまさしく天皇の宮殿を見下ろす場所にあり、天皇家を見張ることもできる。飛鳥や天皇家を守るためではなく、宮殿よりも高所にある邸宅で、宮殿を見下ろしていたと理解すべきであろう。このことは、邸宅の武装化や八佾舞の挙行などの点からも、この時期の蘇我氏が天皇と対等か、むしろ天皇家を超える存在になりつつあることを窺わせる。

飛鳥時代前半の歴史を改めてみると、蘇我氏が天皇家と婚姻関係をもちながら権力の中枢へと入り込み、ある時は武力によって敵対勢力を打破していったこと、その一方で数々の政治政策を天皇家・摂政家と共に成し遂げていったことがわかる。特に推古朝の蘇我馬子の時代の政策は、我が国の律令国家への第一歩と位置づけられる。

飛鳥史の中で、蘇我氏自身も変貌を遂げていった。そして、皇極3年（644）に甘樫丘に邸宅を作る頃には、甘樫丘全体が蘇我氏の要塞と化し、蘇我氏が天皇をも超える存在であることを誇示する結果となった。それが結果的に乙巳の変へと繋がっていき、豪族が力で権力を握る時代から天皇集権国家へと大きく飛躍することになる。これを象徴する遺跡が前期難波宮の大宮殿である。飛鳥時代前半は、蘇我氏の時代であったと言っても過言ではなく、蘇我氏滅亡は、

律令国家成立へ向けての重要なターニングポイントとして位置づけられるのである。

甘樫丘の位置づけや歴史的な変遷は、そうした蘇我氏の繁栄や律令国家の形成と大きく関わっている。

しかし、645年の乙巳の変を境に、甘樫丘遺跡群の性格は一変して、蘇我氏関連の施設はすべて撤去され、古墳も一部を除いて削平・埋没させられる。代わって、７世紀後半には、甘樫丘西半については詳らかでないものの、少なくも東半と南辺では公的施設や邸宅が次々と建ち並ぶようになる。その背景は斉明朝以降の飛鳥における都市域の拡大があった。律令国家の建設を目指すためには、飛鳥の盆地内では狭く、宅地空間の充実が必要となる。それまでも周辺部の開発は部分的に進められていたが、乙巳の変の後、蘇我氏の広大な支配下にあった地が没官地となる。これが都市化のスピードを推し進めたのである。

もう一つ重要なのは、飛鳥の防御施設としての位置づけである。甘樫丘がその位置・立地からも、飛鳥小盆地を守る自然の要害となっていることは、以前に指摘した。こうした性格は、飛鳥を都とするために飛鳥寺の造営時点からみられる。しかし、飛鳥の防御が最も重視されるのは国際的な緊張関係にあった時期は、斉明～天智・天武朝前半である。あたかもそれと軌を一にするように、７世紀後半段階には、飛鳥の東方丘陵上で掘立柱塀が確認されている。位置や立地等から、この塀は飛鳥盆地を囲むように尾根上を巡っていたと想定でき、それはあたかも飛鳥を守る「羅城」的な施設と考えられる。この塀が甘樫丘の丘陵部にも設置されていたことが考えられる[8]（相原2004）。

以上のように、甘樫丘の歴史的な変遷は、飛鳥になぜ都が置かれたのかという課題に対して、ひとつの回答をもたらしている。甘樫丘はその立地により、飛鳥盆地を遮蔽する自然の要害であった。蘇我氏がここを本拠として、飛鳥を都としようとしたのは、飛鳥寺建立とその立地から窺うことができる。最終的に蘇我氏が甘樫丘に居宅を設けたのも、そして７世紀後半の国際緊張時に「羅城」的施設を設けたのも、こうした立地のためである。しかし、都市域の拡大に伴い、甘樫丘は都市域に含まれ、邸宅・官衙が建てられることになる。蘇我氏の支配下にあった土地が、乙巳の変によって没官地になったことが、それを促進させたのであろう。とはいえ、甘樫丘の一帯はいまだ調査がおよんでいない地域も多い。甘樫丘の全貌解明が、飛鳥の理解に重要な視点をもたらすことは間違いないであろう。

本稿を成すにあたっては、今尾文昭・小澤毅・西光慎治・髙橋幸治・竹田政敬・辰巳俊輔・長谷川透の各氏をはじめ、多くの方々よりご教示・ご指導をいただいた。ここに記して感謝の意を表します。

（平成27年12月31日稿了）

註

1）『古事記』の記事の書き下し文は岩波書店の『日本思想体系１　古事記』1982、『日本書紀』の記事の書き下し文は岩波書店の『日本古典文学大系68　日本書紀』1965、『続日本紀』の記事の書き下し文は岩波書店の『新日本古典文学大系12　続日本紀一』1989による。

2）推古朝の小墾田宮の所在地については、雷丘周辺ということが有力視されているが、筆者は石神遺跡の東隣接地の可能性を考えている（相原2013）。

3）今尾文昭氏は、五条野丸山古墳から梅山古墳へ欽明天皇を改葬したという見解をとる（今尾2000）。

4）都塚古墳の調査成果が公表された後、当古墳を蘇我稲目墓とする見解が、新聞紙上をにぎわせた。しかし、白石太一郎が検討するように、家形石棺は６世紀第３四半期、石室は７世初頭と、両者に時期差がある。また、石室形態が、大型横穴

式石室よりも真弓地域にみられる穹窿式横穴式石室の影響を受けており、渡来系にかかる古墳の可能性が高いとする（白石2015）。

5） 古墳の築造年代や蘇我氏の奥津城であることを考えると、被葬者は蘇我石川麻呂と興志の可能性があると考える。

6） 小山田古墳を大陵、菖蒲池古墳を小陵とするときにも課題はある。小山田古墳の外装に榛原石を使用しているのに対して、菖蒲池古墳の外装には榛原石は使用されていない。やはり、規模の大小とともに、構造の類似がほしい。

7） 五条野古墳群が蘇我氏の奥津城であることは、竹田政敬や小澤毅の両氏も指摘している（竹田2001・小澤2002a）。

8） 甘樫丘の丘陵頂部についての調査は少なく、これまでの発掘・立会調査では削平を受けているためか、確認されていない。あるいは地形をそのまま生かした構造だったのかもしれない。

参考・引用文献

相原嘉之1998　「飛鳥地域における古代道路体系の検討－都市空間復原に向けての基礎研究－」『郵政考古紀要　通巻34冊』大阪・郵政考古学会

相原嘉之1999　「小治田宮の土器－雷丘東方遺跡出土土器の再検討－」『瓦衣千年－森郁夫先生還暦記念論文集－』同論文集刊行会

相原嘉之2004　「飛鳥の守り－飛鳥地域における防衛システム構想－」『明日香村文化財調査研究紀要　第４号』

相原嘉之2007　「発掘された蘇我氏の飛鳥－近年の調査からみた蘇我氏の実像－」『東アジアの古代文化　133号』大和書房

相原嘉之2009　「蘇我三代の遺跡を掘る－邸宅・古墳・寺院－」『蘇我三代と二つの飛鳥－近つ飛鳥と遠つ飛鳥－』新泉社

相原嘉之2011　「嶋宮をめぐる諸問題－島庄遺跡の発掘調査成果とその意義－」『明日香村文化財調査研究紀要　第10号』

相原嘉之2012　「律令期陵墓の兆域と空間構成－檜隈陵墓群を中心に－」『条里制・古代都市研究　第27号』条里制・古代都市研究会

相原嘉之2013　「飛鳥寺北方域の開発－７世紀前半の小墾田を中心にとして－」『橿原考古学研究所論集　第16』八木書店

飛鳥資料館2000　『蘇我三代』

明日香村教育委員会1988　『雷丘東方遺跡　第３次発掘調査概報』

明日香村教育委員会1996　「カナヅカ古墳（第１次）範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報　平成７年度』

明日香村教育委員会1998a「カナヅカ古墳（第２次）範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報　平成８年度』

明日香村教育委員会1998b「川原下ノ茶屋遺跡の調査」『明日香村遺跡調査概報　平成８年度』

明日香村教育委員会2000a「豊浦寺跡の調査」『明日香村遺跡調査概報　平成10年度』

明日香村教育委員会2000b「川原亀石遺跡の調査」『明日香村遺跡調査概報　平成10年度』

網干善教2003　「奈良朝火葬墓の一考察」『終末期古墳の研究』同朋舎

猪熊兼勝1992　『見瀬丸山古墳と天皇陵』雄山閣出版

今尾文昭2000　「飛鳥の古墳の被葬者を探る」『飛鳥・藤原京の謎を掘る』文英堂

大脇　潔1997　「蘇我氏の氏寺からみたその本拠」『堅田直先生古希記念論文集』真陽社

小澤　毅2002a「飛鳥の都」『日本の時代史３　倭国から日本へ』吉川弘文館

小澤　毅2002b「三道の設定と五条野丸山古墳」『奈良文化財研究所創立50周年記念論文集　文化財論叢Ⅲ』奈良文化財研究所

橿原考古学研究所1995　「飛鳥京跡発掘調査概報－豊浦寺金堂跡の調査－」『奈良県遺跡調査概報　1994年度』

橿原考古学研究所1998　「飛鳥京跡発掘調査概報－豊浦寺第３次－」『奈良県遺跡調査概報　1995年度』

橿原考古学研究所2015　『小山田遺跡　第５・６次調査』

橿原市千塚資料館1999　「五条野向イ遺跡の調査」『かしはらの歴史をさぐる６』

橿原市千塚資料館2001a「五条野城脇古墳の調査」『かしはらの歴史をさぐる８』

橿原市千塚資料館2001b「五条野内垣内遺跡の調査」『かしはらの歴史をさぐる８』

橿原市千塚資料館2001c「五条野宮ケ原１・２号墳の調査」『かしはらの歴史をさぐる９』

橿原市教育委員会2014　『史跡植山古墳』

橿原市教育委員会2015　『菖蒲池古墳』

宮内庁陵墓調査室1994　「畝傍陵墓参考地石室内現況調査報告」『書陵部紀要　第45号』

宮内庁陵墓調査室1995　「舒明天皇押坂内陵の墳丘構造」『書陵部紀要　第46号』
宮内庁陵墓調査室1999　「欽明天皇檜隈坂合陵整備工事区域の調査」『書陵部紀要　第50号』
斉藤　忠1966　『古墳文化と古代国家』至文堂
西光慎治2000　「欽明天皇陵檜隈坂合陵・陪塚　カナヅカ古墳の覚書」『明日香村文化財調査研究紀要　第２号』
白石太一郎2009「五条野丸山古墳の被葬者をめぐって」『大阪府立近つ飛鳥博物館館報12』
白石太一郎2015「明日香村都塚古墳の造営年代」『大阪府立近つ飛鳥博物館館報18』
高橋照彦2004　「畿内最後の大型前方後円墳に関する一試論－見瀬丸山古墳と欽明天皇陵古墳の被葬者－」『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』大阪大学大学院文学研究科
高橋照彦2005　「欽明陵と檜隈陵－大王陵最後の前方後円墳－」『待兼山考古学論集－都出比呂志先生退任記念－』大阪大学考古学研究室
高橋照彦2012　「欽明陵と敏達陵を考える」『天皇陵古墳を考える』学生社
竹田政敬2001　「五条野古墳群の形成とその被葬者についての憶説」『橿原考古学研究所紀要　考古学論攷第24冊』
奈良国立文化財研究所1974「小墾田宮推定地の調査２」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報４』
奈良国立文化財研究所1976「小墾田宮推定地の調査」『飛鳥藤原宮発掘調査報告Ｉ』
奈良国立文化財研究所1978「平吉遺跡の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報８』
奈良国立文化財研究所1978b「西念寺山瓦窯の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報８』
奈良国立文化財研究所1986「豊浦寺第３次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報16』
奈良国立文化財研究所1995「甘樫丘東麓遺跡　第71-12次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報25』
奈良文化財研究所2006　「甘樫丘東麓遺跡の調査－第141次－」『奈良文化財研究所紀要2006』
奈良文化財研究所2007　「甘樫丘東麓遺跡の調査－第146次－」『奈良文化財研究所紀要2007』
奈良文化財研究所2009　「甘樫丘東麓遺跡の調査－第151・157次－」『奈良文化財研究所紀要2009』
奈良文化財研究所2010　「甘樫丘東麓遺跡の調査－第157・161次－」『奈良文化財研究所紀要2010』
奈良文化財研究所2011　「甘樫丘東麓遺跡の調査－第161次－」『奈良文化財研究所紀要2011』
奈良文化財研究所2013　「甘樫丘東麓遺跡の調査－第171・177次－」『奈良文化財研究所紀要2013』
奈良文化財研究所2014　「甘樫丘東麓遺跡の調査－第177次－」『奈良文化財研究所紀要2014』
花谷　浩2000　「豊浦寺の伽藍配置について」『古代瓦研究Ｉ－飛鳥寺の創建から百済大寺の成立まで－』奈良国立文化財研究所
土生田純之1999「最後の前方後円墳－古墳文化の転機－」『古代を考える　継体・欽明朝と仏教伝来』吉川弘文館
増田一裕1991　「見瀬丸山古墳の被葬者－檜隈・身狭地域所在の大王墓級古墳を中心に－」『古代学研究　124・125号』古代学研究会
増田一裕1996　「見瀬丸山古墳の考古学的研究」『古代を考える57　見瀬丸山古墳の検討』古代を考える会
増田一裕2001　「検証　欽明天皇陵」『別冊歴史読本　歴史検証　天皇陵』新人物往来社
森　浩一1965　『古墳の発掘』中公新書
安本美典1992　「欽明天皇陵の再検討」『季刊邪馬台国　第48号』梓書院
和田　萃1995　「見瀬丸山古墳をめぐる課題」『日本古代の祭祀・信仰　上』塙書房
和田　萃2005　「飛鳥の陵墓－檜隈坂合陵の再検討－」『古代を考える　終末期古墳古代国家』吉川弘文館

出典

第１図：奈文研1974・1978・橿原市1999・2001bを転載
第２図：筆者作成
第３図：明日香村2000bを転載
第４図：橿原市2001a・2001c・2014・2015・橿考研2015を転載
第５図：筆者作成